

緒論、1章

1. 使徒行伝の表題

- ギリシャ語で、プラクシス・アポストロン。
- おそらく、著者がこの巻を著した時には名前がついていなかったと思われる。
- ヘレニズム時代には、ギリシャ語で著された作品に表題をつけることは不可欠ではなかった。
- ルカ・使徒行伝の中でプラクシスはどちらかというと消極的な意味で用いられている。ルカ23. 51、使徒19. 18。
- 同じことは他の新約文書にも妥当。ローマ8. 13、コロサイ3. 9 消極的な用語を著者が表題に選ぶことは考えにくい。

2. 使徒行伝の表題 その2

- 使徒という概念が十二使徒プラスパウロという意味で一般的に用いられるようになるのは2世紀以後のことであって、本書の成立年代と合致しない。
- パウロの文書では使徒は特定の機能の呼称ではなく、もっと広い意味で「使者」の意味。その範囲は十二使徒プラスパウロよりは多い。1コリント15. 7
- ルカ自身も使徒概念を12使徒のみに限定し、パウロにはほとんど使徒という語を使っていない。使徒14. 4、14. 14以外。
- 有力な写本に「使徒行伝」の表題のうち、「使徒」が欠落し「行伝」だけの表題のものが存在する。これは当時、表題が流動的だった証拠である。
- 従って、本書は著者が執筆した時点では無題だったと思われる。

3. 献呈を巡る議論 編集説 1節—5節

- 後代の編集者の改訂説。1—5節、あるいは12節までの序文はもともとルカのオリジナルにはなかったのではないかとする説。ロワジー、ノルデン。
- 本来、ルカ福音書と使徒行伝は一卷だったとする立場。一卷なら使徒行伝の献呈文はいらない。現在の聖書正典として編纂される際に、二つに分けられ、1—5節が編集者の手で加えられた？ ムスー、ザーリン、トロクメ。
- 献呈文編集説の根拠の一点目は、古代の文書の慣例では一卷目の要約とこれに続く二巻目の概略が記述される。ところが、概略に通常あらわれるギリシャ語が欠落している。
- 根拠の二点目。3、4節に使徒行伝で(新約文書でも)ここだけにしか出てこないギリシャ語がある。テクメリオン(証拠)、オプタノマイ(あらわれる)、シナリゾマイ(食